

海峡からの風 27

下関労働教育センターだより

暦を巻き戻させまい

東ティモール支援の仲間から届く年賀状には毎年「ヒロシマ紀元」が記載されている。戦争が生命そのものの存続の危機を孕むようになった「ヒロシマ」。しかし、人類は核兵器・核抑止論は言うに及ばず、核の利用そのものを見直すきっかけをやり過ぎてしまった。

それから六十六年、私たちは「フクシマ」を迎えてしまった。彼の二〇一二年年賀状には「震災紀元」も記載されるようになった。「フクシマ」は人災であり、「文明災」とまで言われる様に、今度こそ私たちは人類のこれまでのあり方を見直し、「生き方」を見直すことが求められ、それが復興の基本となると思っていた。ところが現実には復興の名を借りた経済中心の開発やマネーゲームばかりが目立ち、災いの元凶であるはずの原発を再稼働させ、原発輸出を許して来た。「絆」という甘言を弄して、放射性物質を含んだガレキの拡散に心痛

める人々を非国民呼ばわりし、抗議行動に参加する人への不当逮捕すら平気で行われる。

そんな「フクシマ紀元二年」が終わろうとする時の選挙の結果は、「フクシマ」どころか、「ヒロシマ」以前に戻らんとする考えの政治家が跋扈している。「ヒロシマ」以前に奪った数多の命や尊厳を省みず、九条の精神をないがしろにし、軍隊の復活を掲げ、原発はおろか核武装すら語られ、あたかもファッションのごとき大言壮語や心地よく響く言の葉をあやつる人気者にすぎる政治。「ン」がいつのまにか消えることの無い様、キリストの歩みに倣って、祈り、行動するしかない。

下関労働教育センターは、日韓のイエズス会が協働で原発・平和（基地）・歴史認識・環境問題に取り組む活動の拠点としての働きを始めた。暦を巻き戻さんとする流れに抗う楔になれるよう、力添えを願う。

（下関労働教育センター）

大城研司